

看護師や介護士、臨床心理士、カウンセラー、ケア・マネージャーといったケアの専門スタッフのみならず、教師や僧侶もふくめ、個人としてのひとを相手に、広い意味でのケアといういとなみにかかわっているひとびと。というのは、みずから仕事の専門性ということに、しばしば疑いやためらいを感じる。

おなじ「ひと相手」であっても、サービス業の場合には専門的なテクニックとか、コツや「手」といったものはある。が、これがケアという仕事と異なるのは、サービス業では「顧客」とか「消費者」を相手にするのであって、名前をもつたひとりの「個」を相手にするのではないからだ。相手に、まるで家族か友人みたいに、私的な好意をもつてているかのようなそんな顔をして、つまりは、そういう親密な感情を演じつつサービス業務をしなければならないという意味では、広い意味で「感情労働」として一括りにはできようが。

それにもしても、ケアといいういとなみにおける専門性とは、いったいどういうもののなのだろうか。看護師や介護士、カウンセラーから教師や僧侶まで、ケアといいういとなみには「資格」がつきものなのだが、ケアの「プロ」としての「資格」は何に拠っているのだろう。

じつさい、子育てにしても、教育にしても、介護や介助にしても、「資格」をもつたひと、専門的な知識や技法をそなえたひとが、かな

ケアの専門家？

鷲田清一
washida kiyokazu

らす子育て、教育、介護・介助において秀でているというわけではない。正確というわけでもない。新米の教師や僧侶や看護師よりも年輩の男女のほうが、はるかに行きとどいた教育や深い語りかけや厚い看護ができるとうのは、見なれた光景である。かならずしも専門のではなく、むしろ人生の経験をたくさん積むということが、ケアの実際においては「資格」以上にはたらくなというのは、どういうわけなのだろう。

●



あるが、ここで問題をはつきりさせるために、あらためて引いておきたい。

ひとつは、つい先頃までわたしの教室にいたなじみの看護師の話である。彼がはじめて精神病棟で勤務についた日、患者さんたちの病室に、ある混乱が起り、先輩の看護師から「おーい、薬に行つてこい！」と命じられた。「薬に行つてこい」というのは、病室のまん中で寝てこい、という意味だった。混乱のなかでひとりぼつんと大の字になつて寝る。何もしない。ところが、しばらくすると辺りの喧騒をよそに、ほんとうに眠り込んでしまつた。ふと気配を感じて目を開けると、「こいつどうしたんだろう……」といった面もちで、彼の顔をのぞき込むいくつかの顔があつたというのである。これが薬なのだと、その先輩は言いたかったのである。その薬とは、何もせずに患者の傍らにいつづけるということだつた。生きる動機を内に感じあぐねている患者のなかに、他者への関心が生まれるようにする薬であつた。

もうひとつの話は、わたし自身が経験したものである。かれこれ十数年前、腹部の手術のために入院した。術後、数日間はじぶんの身体のことと精一杯だったが、麻酔が切れたあとで痛みもぼちぼち取れてきて、やつとまわりを見る余裕もでてきた頃、ふとあるひとりのナースの見習いとおぼしき女性の不審な

行動に気づいた。だれもが眠気に襲われる昼食後のひととき、白衣のその女性は、決まってわたしの前の、意識も半分途切れがちな高齢の男性のベッドにやつてきて、付き添い用の椅子に腰かけ、カーテンをわずかに引き、眠りこけているそのおじいさんの蒲団に覆いかぶさつて、ぐたーっと「お昼寝」をするのだった。

はじめは、なんて横着なナース、なんてふてぶてしいナースだと、内心イライラするものがあった。ところがどうも様子がおかしい。ナースはぐっすり眠つているのだが、おじいさんはいつもと違うのだ。おじいさんは相当な高齢者で、食事のときも半分眠つているような覚束ないひとだつたのだが、その子が眠りはじめるとき、逆に眼を見開いて廊下のほうをじつと見やるようになつた。要するに見張り、この若いナースが眠つてているのを見咎められないか、しつかり廊下を監視するようになつたのである。そして、上司のナースが通りかかるとき、その子の背中をほんと叩いて起こす。おじいさんの面持ちは、ちょっとどこつちが照れるくらいに満足しててきた。

そのおじいさんは、病室ではそれまで、何から何までナースに「してもらう」生活だった。他人のために何かをするという生活からは、たぶん、ほど遠い生活だった。それがだれかのためにじぶんにできることを、その覚



束ない意識のなかで、それでも見つけた。これは大きなことである。じぶんの存在というものが他人のなかで何のポジティイヴな意味ももつていないとということを思い知らされるのは、何歳になつても辛いことである。じぶんがいてもいなくともどつちでもいい存在だということを思い知らされるのは。家庭でも、学校でも、職場でも。このおじいさんは、この子はじぶんがないとだめになると、瞼げな意識のなかで感じたにちがいない。そのことがこのひとの顔をいきいきとさせた。

生きる力というものは、じぶんの存在が他人のなかで意味があると感じるところから生まれる。この若いナースにはそういう想いは

なかつただろうが、それでも彼女がそこにいるというただそのことが、意にはなくともおじいさんに力を与えた。たとえ、怠慢以外のなにものでもないにしても、彼女がただそこにいるということで、逆に、おじいさんはそことにじぶんがいることの意味を見いだした……。そんなふうにわたしは考えた。

傍らにいるという、ただそれだけのことでは起こってしまう出来事があるということである。沈黙が饒舌よりはるかに物を言うことがあるように、何もないことが献身的な行為よりも多くをなしとげるということがある。何もしないというより、してはいけないことが、結果としてはよりよいことをなしとげるということもある。そしてこれが、ケアという現場の一筋縄ではないところだ。

わたしはこの患者さんにいつたい何ができる
ただろうか……と、じぶんを振り返ることは
もちろん大事ではある。しかし、ケアをすぐ
に何かを「してあげる」ことと考へることに
は、ちょっとした落とし穴がある。そのこと
で患者は反対に、いつも何かを「してもらう」
ひととしてじぶんを意識せざるをえなくなる
からだ。そのことで患者の生きようという力
を削いでしまう面が、ケアするひとのそういう
意識のなかにはあるのである。その意味で
患者に心配をかけることが、結果としてケア

になるということは往々にしてある。

わたしたちの社会は、ひとがその生涯において何をなしどうかによってその価値が決

のうちに何か特異なものを探しだそうとして、も、そんなものはめつたなく、最後は鬱々ふきしか残らないのである。

わたしは、右で長々とふたつの事例を引いたのは、このそれぞれの「わたし」の特異性は、その内部に能力や素質や個性としてあるのではなく、他人との関係のなかで、そのつど証されるしかないものだということを確認したかったからである。

点滴や検温の技術があるだけでは、看護師の「資格」があるとはいえない。正確な知識の教授ができるというだけでは、教育者の「資格」があるとはいえない。こうした「プロ」の技術を全うすることにかまけているのは、逆にケアの「資格なし」である。専門的な技能のあるなし以上に、患者でも生徒でもなく患者でもあり、生徒でもあるそのひと自身の心身のありようそのものにかかわっていくのでなければ、ケアとはいえない。

ではなぜ、ケアにエクスパートが要るのか
ケアが、「身内」や「近所のひと」といった
共同的な関係のなかにあるひとが担いきれな
い状況が生まれてきたからである。たとえば
高齢者介護をとりあげるなら、「養老院」と
か「老人ホーム」とよばれた当初は、家族介
護の補完をするものとして、それらの施設は
あつた。家族ができないことを、というわけ

である。いまでは、介護は家族が負担するのが当然という考え方は少しずつ萎んでいつて、ひとりのひとが別のひとの生活をそつくり看るようには人間はできていない、という理念に立つてケアを公共的に担う考え方へ移行しつつある。

こうした仕事としてケアが位置づけられるようになつたことが、専門性が問われる前提としてある。ケアといふいとなみが家族の外に出され、ひとつの職業になつたのである。が、ケアの専門性は専門性としては特殊である。なぜなら、それは職業を超える職業であらざるをえないからである。ここで「聖職」と言いたいのではない。そうではなくて、専門家というあり方にとどまつていたら、その専門性がなりたたないのである。いいかえると、ケアにおいては、相手にとつてほんとうに良いほうへ、そのひとの状況を変えてゆくということだが、つまり、そのひと自身の問題、その特異性の前で、状況に応じてみずから専門的知識や技能を棚上げにすることができるということが、つまり、その専門性として要求されるのである。そのとき、ケアする者自身が、別のもうひとりの特異な存在として現われてしまわざるをえないのである。看護師でもあり、僧侶でもある「そのひと」自身が。そしてそのなかで、しばしば言われるよう、ケアを必要としているひとに、ほ

かならぬケアする側がケアされるということも、しばしば起ころ。「弱い」ひとの前で、ケアする者がこれまでそれを抑え、あるいは隠すというかたちで必死にがんばつてきたのみずからの「弱さ」に、これまでとはちがつて素直に向きあえるようになるということ。

が。

北海道・浦河に「べてるの家」という、精神障害体験者のグループホーム・共同作業所がある。この作業所は「安心してサボれる会社」をモットーとしている。つまり、気が滅入つて働きたくなかったら、勝手に休んでもいい、そういう安心のある会社をめざしている。ふつうの会社なら、数人かかる仕事を一人でできるようになるのが「効率化」だが、べてるの家では、一人でできる仕事を二人、三人でできるようになるのが「効率化」とされる。つまり、たがいにそれぞれの心身の調子をおもんばかり、それぞれに特異な者を特異なままに認め、時に応じて代わりになると

いうかたちで助けあえること、そういう場と見てべてるの家はある。特異性と代替可能性の境というものが揺らいでくる。そのうえで、である。ケアという名の、ひとつひととの関係のなかで起こつてきている出来事にどういう意味があるのかを聞いたのは。そのとき、「ケアのエクスパート」たちは「どうしたらケアラーとしての専門性を向上できるのか」といった硬直した問い合わせかれているであろう。

「成熟とは、『自分がおおぜいのなかの一人（ワン・オブ・ゼム）であり、同時にかけがえのない唯一の自己（ユニーク・アイ）である』ということである」ことである」と。と。代わりになるということ。それは、べてるの家のひとがそれぞれみずからの特異性を棚上げにして、ひとつの代替可能な役柄を演じることができることだ。ケアのエクスパートの場合も、ベクトルは逆だが、つまり専門性を演じることを棚上げにして、ケアの相手の前で名前をもつたひとりのひとになれることだが、状況に応じておのれの持ち札を棚上げにするという、同じことをしている。ふだんはケアされる側にいるべてるの家のひとと、ふだんはケアの専門家であるひととが、同じことをしている。

こうして、右で述べた、ケアという関係におけるケアする者とケアされる者の反転という事実をもふくめて、ケアの専門性と非専門性の境というものが揺らいでくる。そのうえで、である。ケアという名の、ひとつひととの関係のなかで起こつてきている出来事にどういう意味があるのかを聞いたのは。そのとき、「ケアのエクスパート」たちは「どうしたらケアラーとしての専門性を向上できるのか」といった硬直した問い合わせかれているであろう。

（わしだ きよかず・大阪大学大学院文学研究科教授
著書に『時代のきしみー（わたし）と国家のあいだ』
TBSブリタニカ